

# 集団決定法の効果に関する現場実験\*

— 献血行動への適用 —

佐々木 薫\*\*

## 問 題

本研究は、いわゆるレヴィン流の集団決定法を用いることによって、学生たちの献血の実行率を高めることができるかどうかを現場実験で確かめ、併せて実行率を規定する諸要因を明らかにしようとするものである。

この研究の行われた関西学院大学では、学生の課外活動団体の1つである宗教総部献血実行委員会が年4回（春、夏、秋、冬）献血週間を設け、赤十字社の採血用バスをキャンパスに招いて、学生からの献血を行っている。1回の献血週間には授業の行われている週日の連続3日間が当てられ、この期間宗教センター横に採血バスを待機させ、キャンパスを通行する学生たちに向かって、委員会の学生がマイクで呼びかけたり、ビラを手渡ししたりして、献血を勧め、バスに誘導するのである。このような期間中の直接的な呼びかけ以外にも、学内の掲示板にポスターを貼付したり、立て看板を設置したり、さらには新入生に向けてダイレクトメールを送付したりしている。そして毎回の献血週間に全学生の約3～4%が実際に献血している。

池尻と中原（1976）はダイレクトメールによる説得的コミュニケーションの効果を調べる研究を試みているが、実行率を高める手段としては必ず

しも有効とは言えないとの結果を得ている。

本研究で試みようとする「レヴィン流の集団決定法」は、第2次世界大戦末期にアメリカ合衆国でK.レヴィンの指導の下に実施された食習慣の変更（Lewin, 1953）に用いられ、顕著な効果をあげた技法である。わが国でもこの技法の効果を実証した研究がいくつかあるが、詳細なレビューは別の箇所で行っている（佐々木・永田, 1986）、ここでは省略する。

## 方 法

**対象者と実施時期：**関西学院大学の課外活動団体およびインフォーマルな仲間集団に呼びかけて4～6人ずつ話し合いのできる場所（心理実験室、空き教室、学生会館の集会室、学生食堂、キャンパス内の木陰などが利用された）に集まってもらい、実験者の1人が司会者となり、もう1人が助手役をつとめてそれぞれ集団決定の実施とデータの収集に当たった。ただし、この時期の4年生は多くの場合、課外活動団体から引退し、就職活動や卒業論文作成など特殊な状況に置かれていることを考慮して本実験の対象者から除外した。実施の期間は1976年8月3日～9月7日（前期）と同年10月4日～21日（後期）とであった。このように実施時期を2つに分けたのは、直近の献血週間が10月25日～27日に予定されていたのに照準を

\*キーワード：集団決定法、献血行動、規定要因／相関項

\*\*関西学院大学社会学部教授

本研究は佐々木薫の指導の下で作成された次の卒業論文から資料を得ている。記して謝意を表する。ただし、（ ）内は旧姓。

大石（野口）玲子・西尾（前川）佳子「集団決定法の効果に関する現場実験」

関西学院大学社会学部 昭和52年度卒業論文

なお、本研究の主要部分は下記の学会大会で発表した。

佐々木薫「集団決定法の効果に関する現場実験：献血行動について」

日本社会心理学会 第18回大会 1977年 発表論文集 Pp. 88-89.

合わせ、集団決定から献血週間までの期間に長短の差を設けて、それが献血の実行率にどのような効果をもたらすかを見ようとしたからである。結局、1年生～3年生の男子83名、女子51名、計134名、集団数は27集団（いずれも同性で構成されていた）が献血促進を目指す集団決定に参加した。参加した集団数と人員の内訳は表1の通りであった。

表1 集団決定に参加した集団と人員

	前期	後期	計	人員
男子	6 集団	11 集団	17 集団	83 名
女子	4 集団	6 集団	10 集団	51 名

**手続き**：集団決定法による献血促進の働きかけは次の手続きに従った。

(1) オリエンテーション (約4分)：集まってももらったことへの感謝を述べ、実験者（司会者）と実験補助者（助手）の自己紹介（学内の宗教総部に所属する献血委員会のメンバーとして）を行い、献血週間についての全般的オリエンテーションを与えた。

「今日は、お忙しいところをお集まりいただき有り難うございました。私たち（司会者と助手、いずれも女性）は宗教センター内にある宗教総部献血実行委員会の者ですが、委員会活動の一環として、広く本学学生の皆さんと献血について話し合い、私たちの活動について理解を深めて頂くとともに、私たちもこの活動を進める上でどんな問題があるか理解を深めていきたいと思っています。

(2) 事前の質問紙調査 (約5分)：調査項目には、井上和子・池尾真弓・中原則子3氏の考案になる「献血についての調査」（26項目の陳述文に賛成－反対を5段階尺度上に回答）に加えて、①献血という言葉を知っているか、②現在、輸血など医療面で血液が不足していることを知っているか、③自分の健康に自信があるか、④今までに献血したことがあるか（あれば、何回あるか）、⑤今後機会があれば献血したいと思うか、⑥自分の血液型を知っているか（それは、何型）、⑦1回の献血でどれくらいの量（何cc）が取られるか知っているか、などが含まれていた。質問紙は助手が配布し、回収した。

(3) 献血運動の説明と献血実行の呼びかけ (約5分)：事前に用意したパンフレットを配布し、それに依拠しながら①献血委員会の活動について、②献血の必要性について、③献血者の安全をまもるための基準と方策について解説し、最後に献血委員会としては「一人でも多くの方の献血」を希望している旨を伝えた。

(4) 献血についての集団討議 (約30分)：献血に関して自由に話し合ってもらおう。献血委員会への質問、実行の細部についての疑問、自己の見解の表明、自分にとってのメリットやデメリット、などなど何でも自由に述べてもらい、司会者も必要に応じて発言した。また、途中で発言がしばらく途切れる場合には、司会者の方から「何か疑問に思うことはないか」「皆さんは献血についてどう思っていますか」などの問いかけを行い、発言を促した。

(5) 挙手による決意表明 (約1分)：討議の終了に際して、司会者は次のように述べて、献血実行に関する決意表明を求め、挙手した人を目立たないように記録した。

「献血についての話し合いに協力していただき、有り難うございました。私たち献血実行委員会では、来る10月25日から27日まで秋の献血週間を予定しています。その折に献血を実行してみようと思われる方はちょっと手を挙げてみて下さい。もちろん、献血は強制ではありませんし、予定は未定（いろんな都合で変更が生じ得る、という意味ですが）ですから、あまり窮屈にお考えにならないで下さい。

(6) 事後の質問紙調査 (約5分)：質問項目には、事前調査で用いた「献血についての調査」に加えて、①話し合いの雰囲気は良かったか、②グループのメンバーと打ち解けて話すことができたか、③献血実行委員会の人の話はよくわかったか、④このグループの中で今度の献血週間に何人くらい（自分も含めて）実行すると思うか、などが含まれていた。事前調査と同様に、助手が用紙の配布・回収を行った。

以上、1集団当たりの所要時間は約50分であった。

## 結 果

集団決定への参加者が1年生から3年生までに限られていたことから、これと比較する不参加者群もこれらの学年に限定した。この時期全学<sup>1)</sup>の1年～3年生の総数は9653名であったから、集団決定への参加者134名を差し引くと、不参加者群は9519名となった。もちろん、この人数には公式に把握されていない長期欠席者が含まれている可能性があり、それらは参加者群より不参加者群に偏って多く含まれていると思われるから、結果の解釈においてはその点への配慮が必要となろう。

**秋の献血週間での実行率：**さて、10月25、26、27日の3日間に献血を実行した1年～3年生は453名であった。その内訳は表2のごとくであった。集団決定参加者134名中16名が献血を実行し、不

表2 秋の献血週間(10月)における実行者数と非実行者数

集団決定に	実行者	非実行者	合計	実行率
参加	16	118	134	11.9%
不参加	437	9082	9519	4.6%

参加者9519名中437名が実行していた。率にして前者が11.9%、後者が4.6%の実行率である。この差は $\chi^2$ 検定により $p < .01$ 水準で有意であった。実行率は集団決定参加者の方が有意に高かったといえる。

**冬の献血週間での実行率：**ついで同年12月1、2、3日の3日間に行われた冬の献血週間では、さきの集団決定参加者134名中9名<sup>2)</sup>が、また不参加群9511名<sup>3)</sup>中360名が献血を実行していた。その内訳は表3に示されている。実行率はそれぞれ7.2%と3.9%であり、その差はわずかに

表3 冬の献血週間(12月)における実行者数と非実行者数

集団決定に	実行者	非実行者	合計	実行率
参加	9	125	134	7.2%
不参加	360	9151	9511	3.9%

$p < .10$ 水準で有意であった。集団決定不参加者群(対照群)の実行率が秋の4.6%から冬の3.9%へといくぶん低下していることは、気候の変化その他何らかの理由で献血の実行がいくらか困難になったことを暗示しているが、集団決定参加者群(実験群)の実行率が11.9%から7.2%へと大幅な低下を示したことは、この事情を差し引いてもなお大きいものであった。このことは集団決定の効果が時間の経過とともに減衰していくものであることを示唆している。

**集団決定から献血週間までの期間と実行率：**集団決定への参加から献血週間までの期間の長短が献血の実行率にどのような効果を持つかという問題は、本研究の企画の段階から提起されていて、方法の項で述べたように集団決定を前期(8月初旬～9月初旬)と後期(10月初旬～中旬)に分けて実施していた。したがって、後期に集団決定したグループは1～3週後に秋の献血週間を迎え(条件A)、さらに5～7週後に冬の献血週間を迎えていた(条件B)。他方、前期に集団決定したグループは8～11週後に秋の献血週間を迎え(条件C)、さらに13～17週後に冬の献血週間を迎えていた(条件D)。

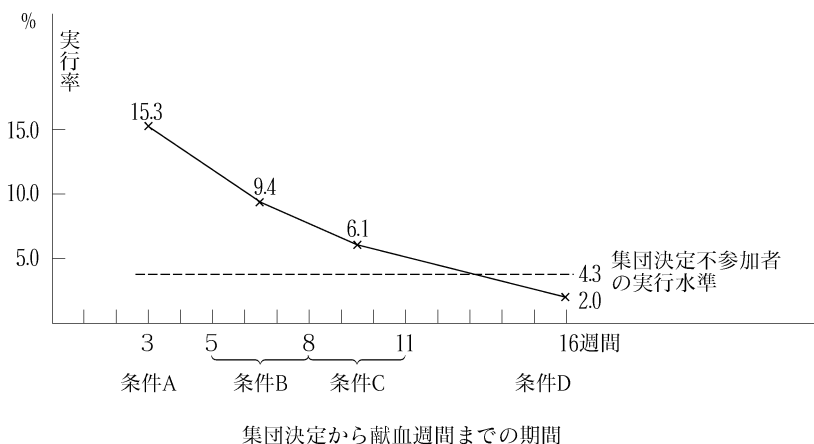
これら4条件について別々に実行率を検討したのが表4である。この表を単純に読めば、各条件の献血実行率は集団決定への参加から献血週間までの期間の短い順に、条件Aで15.3%、条件Bで9.4%、条件Cで6.1%、条件Dで2.0%と、単調に低下している。しかし、ここで注意すべきは、同じ対象者が2回(つまり、秋と冬の献血週間で1度ずつ計2回)数えられていることと、条件AとBは同一対象者(すなわち、後期集団決定の参加者)であり、条件CとDはこれとは別の同一対象者(前期集団決定の参加者)であることである。本研究のデータがもつこのような構造は、ここに見られる実行率の低下がすべて献血週間までの期間の長短によるものとは言い切れない部分を残している。前者に関して言えば、先にも触れ

- 1) 当時まだ神戸三田キャンパスはなく、神学部、文学部、社会学部、法学部、経済学部、商学部、理学部の7学部がすべて上ヶ原キャンパスにあった。また、スクール・カレンダーも現行と異なり、7月1日から8月31日までが夏季休暇で、9月1日から講義が再開され、9月の中～下旬に前期の定期試験が行われていた。
- 2) うち4名は先に行われた10月の献血週間にも献血を実行していた。
- 3) 秋の献血週間の時期から冬の献血週間の時期までに、休学、退学、除籍などにより、集団決定不参加群に8名の減少が記録されていた。

表4 条件別にみた献血実行率

集団決定	秋の献血週間			冬の献血週間		
	実行者	非実行者	実行率	実行者	非実行者	実行率
後期 参加者	13	72	15.3% (A)	8	77	9.4% (B)
不参加者	437	9082	4.6%	360	9157	3.8%
差の有意性 ( $\chi^2$ -test)	p<.01			p<.01		
前期 参加者	13	46	6.1% (C)	1	48	2.0% (D)
不参加者	437	9082	4.6%	360	9157	3.8%
差の有意性 ( $\chi^2$ -test)	p<.01			n.s.		

図1 時間経過と集団決定の効果



たように季節変化の影響や秋の実行・不実行が冬の実行に及ぼす効果などが問題になり得るし、後者に関していえば、前期・後期2群の集団決定参加者間に献血実行への傾性に差がなかったかどうか(事後的に)疑問が生じ得る<sup>4)</sup>。これらの問題や疑問が残っていることを認めた上で、ひとまずここでは大まかに集団決定からの時間経過と献血実行率との関係を見てみよう。図1は、時間経過を週単位で横軸に目盛り、条件A, B, C, Dの実行率を縦軸にとって、両者の関係を図示したものである。その際、集団決定不参加者の実行率は秋・冬2回の献血週間における実行率の平均(4.3%)として一律に(直線で)表示した。この図と表4(特に差の有意性の検定結果)とを併せ読むとき、あくまで本実験の条件下においてではあるが、集団決定参加から1~3週後に約15%あった実行率が時間経過とともに漸減し、13~17週後には約2%にまで低下したこと、そして集団

決定の効果は7週あたりまでであったことが理解される。

なお、秋の献血週間に実行した者が冬の献血週間に再度実行する確率は、集団決定参加者と不参加者とで異なるであろうか、という疑問について検討した結果は、以下のとおりであった。集団決定参加者で秋に献血した16名中4名(25.0%)が続けて冬にも献血しており、他方、集団決定不参加者では秋に献血した437名中125名(28.6%)が冬にも献血していた。これら両群の比率の差は有意でなかった。

**献血実行への要因分析**(林の数量化Ⅱ類による): 集団決定に参加した134名のデータを用いて、献血の実行・不実行を外的基準とし、質問紙調査の各項目に対する回答その他から抽出した20個の変数を説明変数とする、数量化Ⅱ類による判別分析を試みた。相関比( $\eta$ )は.562、判別率は78%を得た。各説明変数のレンジ(range)

4) これらの疑問のいくらかは、このデータの構造に沿った分散分析にかけることで原理的には排除できるであろうが、反復の効果、季節の影響、両群間の偶発的の偏りなどによる汚染は解消しない。

表5 献血の実行を規定する要因：林の数量化Ⅱ類による ( $\eta=.562$ )

説明変数		カテゴリー	カテゴリー ヴァリュー	実行せず←	→実行	range 〔偏相関〕
1	学部	1. 文学部	-.06130			.10989 〔.044〕
		2. 社会学部	.00518			
		3. その他	.04860			
2	学年	1. 1年生	-.01446			.05674 〔.018〕
		2. 2年生	.00230			
		3. 3年生	.04227			
3	性別	1. 男性	-.01569			.04123 〔.022〕
		2. 女性	.02554			
4	期間	1. 1～3週間前	.04677			.12789 〔.073〕
		2. 8週間前	-.08112			
5	あなたは現在、血液が不足しているのを知っていますか。	1. 知らない	-.05714			.06380 〔.026〕
		2. 知っている	-.00667			
6	あなたは自分の健康に自信がありますか	1. 自信がない	-.03969			.07711 〔.046〕
		2. まままあ自信がある	.03741			
		3. 自信がある	-.02872			
7	あなたは今までに献血に参加したことがありますか (経験の有無)	1. ない	-.04866			③ .31430 〔.119〕
		2. 1回	.02079			
		3. 2回以上	.26564			
8	あなたは今後、機会があれば献血したいと思いますか	1. 思わない	-.02231			.10164 〔.055〕
		2. してもよい	-.04604			
		3. したい	.05559			
9	あなたは採血量を知っていますか	1. 知らない	-.01712			.03018 〔.018〕
		2. 知っている	.01306			
10	話し合いの雰囲気はどうでしたか	1. 良くなかった	-.17367			⑤ .24192 〔.095〕
		2. まままあであった	.06825			
		3. 良かった	-.09366			
11	あなたはグループのメンバーと打ち解けて話すことができましたか	1. 打ち解けて話せなかった	-.06053			.12442 〔.057〕
		2. まままあ打ち解けて話せた	-.03391			
		3. 打ち解けて話せた	.06389			
12	献血実行委員会の人の話は怎么样了か	1. わからなかった	-.04961			.06509 〔.015〕
		2. まままあわかった	.01549			
		3. よくわかった	-.00687			
13	認知された合意度	1. 0%	-.10272			① .62627 〔.161〕
		2. 1～20%	-.08772			
		3. 21～40%	-.07195			
		4. 41～60%	.05183			
		5. 61～80%	.01494			
		6. 81～100%	.52355			
14	客観的合意度	1. 0%	-.03202			② .35822 〔.120〕
		2. 1～20%	-.14743			
		3. 21～40%	.09624			
		4. 41～60%	.09968			
		5. 61～80%	-.25854			
15	自己決定	1. 自己決定していない	-.05925			.17644 〔.094〕
		2. 自己決定した	.11719			
16	第1回目態度得点	1. 9～28点	-.02074			.03231 〔.015〕
		2. 29～48点	.01157			
17	第2回目態度得点	1. 9～28点	-.02014			.02966 〔.012〕
		2. 29～48点	.00952			
18	個人の態度変容	1. マイナスに変容した	.12617			.17941 〔.072〕
		2. 変容していない	-.05325			
		3. プラスに変容した	-.01688			
19	グループの態度変容	1. 変容していない	-.04827			④ .25875 〔.121〕
		2. プラスに変容した	.21047			
20	客観的合意と認知された合意の関係	1. (客) 高く (認) 高い	-.11268			.21835 〔.074〕
		2. (客) 低く (認) 高い	.02132			
		3. (客) 高く (認) 低い	-.03747			
		4. (客) 低く (認) 低い	.10567			

と偏相関係数、カテゴリー・ヴァリユーは表5に示す通りであった。表中カテゴリー・ヴァリユーの右側にはこのヴァリユーの方向と大きさを棒グラフで示してある。

献血の実行・不実行を分ける最も大きな説明変数は「認知された合意度 (No. 13)」であった(レンジ=.62627)。これは「あなたは、このグループのメンバーの中で自分自身も含めて、いったい何人ぐらいの人が今度の献血週間に参加(献血)すると思いますか」との質問に対する回答で、合意度が高いということは「参加すると思う」人数を多く認知していることを意味する。カテゴリー・ヴァリユーの示すところによれば、40%以下ではむしろ不実行へ傾くが、81%以上の合意を認知したとき強力に実行へと進む様子が窺える。

次に大きなレンジを示したのは「客観的合意度 (No. 14)」であった。これは集団決定の最終段階で実際に献血実行を決意して挙手したメンバーの数を集団の全成員数で割ってパーセンテージに変換したものである。20%以下では不実行に、21~60%で実行に傾いているが、61~80%で大きく不実行に反転している。最後の部分の意味づけは難しい。同じグループのメンバーたちが大勢挙手するのを見て、自分が実行しなくても委員会は困らないとも思うのであろうか。それにしてもこの「客観的合意度」と上でみた「認知された合意度」との関係はどうなっているのであろう。周りにいる者たちの挙手を見誤るのか、それとも挙手は建前であって本音は別のところにあると忖度しているのか、疑問が残るところである。とにかく両者は食い違いを見せ、献血実行への働きも異なっておりながら、ともに献血行動を規定する大きな要因をなしているのである。

第3に大きな要因は、過去における献血の経験 (No. 7) であった。カテゴリー・ヴァリユーの示すところでは、過去に2回以上経験がある者は実行に進みやすいことがわかる。

第4の要因は「グループの変容 (No. 19)」であった。これは集団決定を挟んでその前後に実施した「献血についての調査」によって測定された態度変化をグループ単位で捉えたものである。当然ながら、グループの態度が献血に対して好意的(プラス)に変化するということはメンバーたち

の献血実行を促進する方向に作用している。

5番目に大きな要因は、集団決定の際の「話し合いの雰囲気 (No. 10)」であった。これは献血実行を促進する要因としてではなく、「(雰囲気が)良くなかった」場合に不実行へと向かわせる要因として働いている。

## 考 察

大学キャンパスで定期的に行われる献血キャンペーンの機会を捉えて、レヴィン流の集団決定法の効果を検討した結果、集団決定への参加後1~3週間目に秋の献血週間を迎えた学生群で15.3%と最も高い実行率が得られた。この実行率は彼らが5~7週間後に冬の献血週間を迎えたときには9.4%へと低下したが、集団決定を経験しなかった一般の学生たちの実行率4.3%に比べれば、依然として有意に高かった。しかし、秋の献血週間の8~11週前、そして冬の献血週間からは13~17週も前に集団決定を行った学生群ではこれら2度の献血週間でそれぞれ6.1%と2.0%の実行率しか示さず、集団決定を経験しなかった一般学生たちの実行率との間に有意差は見出されなかった。

これらの結果は、レヴィン流の集団決定法が献血行動の促進に有効であることを実証すると同時に、その効果は集団決定の実施後時間の経過とともに減衰していくことをも明らかにしている。このような効果の減衰は、常識的には当然のこととして想定されていたであろうが、実証研究としてここまで踏み込んだ研究はこれまでになかった。効果減衰の過程を明らかにすることは、次のような実践的疑問に答えを用意することになるであろう。献血行動を促進するにはいつ集団決定を実施するのが効果的か。本実験の結果の示すところでは、献血週間の直前がよい、ということになる。数多くの集団決定を実施するにはそれなりの長い期間が必要になるが、どれだけの期間が利用可能であろうか。本実験にはすでに結果の項で指摘したような実験デザイン上の難点があるため、性急な一般化は慎まなければならないが、一応、本研究の条件下でという条件を付した上で、献血週間に先立つ7週間まで、と答えることが許されよう。

林の数量化Ⅱ類を用いた要因の分析からは、①集団内での認知された合意度、②客観的合意度、③過去における献血の経験、④献血に対する集団の態度の変容、⑤集団での話し合いの雰囲気などが大きな要因として浮上してきた。①と②は、大学生たちにすすんで心理学や社会学の被験者になることを働きかけた Bennett (1955) の実験においても有意な要因であった。③は経験によって従来からよく指摘されていた要因である。不安を伴う新しい行動に踏み切ろうとする時には常にこの要因が重要性をもってくるものと思われる。④は態度と行動の間の一般的な関係を追認するものである。⑤は集団決定の運営と密接に係わる要因として注目されなければならない。「良い雰囲気」のもとで（しかも、働きかけに対する賛同者をできるだけ増やして-①②の要因）集団決定を完了させるような運営の技術が求められているのである。

最後に、この方法のコストパフォーマンスの問題に触れておかなばならないであろう。

集団決定法は確かに献血の実行率を高めた。しかし、これを実人数でみると、集団決定法に参加した134人中、秋の献血週間に16人、冬に9人、合わせて延べ人数25人が献血を実行していた（秋・冬両方に献血した者が4人いた）。この成果を得るために、（前・後期合わせて）約8週間かけて27集団を集め、順次集団決定を実施したのである。一方、従来の方法で呼びかけて797人の献血実行者を得ていることを思い合わせると、支払ったコストの割には成果が小さかったと言わざるを得ない。もちろん、この結果には、献血週間までの間隔があまりにも長すぎて有効な成果を挙げ得なかった（前期実施の）10集団が含まれているから、徒労感がいくらか強調され過ぎているかも知れない。いずれにせよ、もっと効率よく高い成果をあげるには、最適の時期を選び大規模にかつ短期間で集団決定を実施する工夫が求められる。

## 要 約

大学キャンパスで定期的に行われる献血キャンペーンの機会を捉えて、レヴィン流の集団決定法の効果を検討した。1～3年生の学生に呼びかけ

て、4～6人から成る集団でキャンパス内の所定の場所に集ってもらい、献血促進の働きかけを集団決定法によって行った。この集団決定による働きかけは次に予定されていた献血キャンペーンまでの間隔に長短の差を設けるために、2期に分けて実施された。結局、呼びかけに応じて集まってくれたのは前期10集団、後期17集団、計27集団の134名であった。

献血実行率は、キャンペーンまでの間隔が最も短かった群（1～3週間）で15.3%と最も高く、5～7週間の間隔で9.4%と低下し、さらに2度目のキャンペーンまでの間隔をこれに繋いで考えると8～11週後で6.1%、そして最長の13～17週後では2.0%まで低下していた。集団決定に参加しなかった同学年の一般学生の実行率は2度のキャンペーンにおける実績の平均で4.3%であった。これを基準にとれば、本研究の条件下で集団決定による効果が認められるのは、7週後までと考えられる。

集団決定の前後に収集した質問紙その他のデータから20個の説明変数を抽出し、これに林の数量化Ⅱ類を適用して、献血の実行・不実行を外的基準とする判別分析を行った結果、①集団内での認知された合意度、②客観的合意度、③過去における献血の経験、④献血に対する集団の態度の変容、⑤集団での話し合いの雰囲気などが大きな要因をなしていたことが判明した。

## 文 献

- Bennett, E. B. (1955) Discussion, decision, commitment, and consensus in "group decision". *Human Relations*, 8, 251-273.
- 池尻真弓・中原則子 (1976) 献血行動に及ぼす要因の分析 関西学院大学社会学部 昭和50年度卒業論文
- Lewin, K. (1953) Studies in group decision. In D. Cartwright & A. Zander (Eds.) *Group Dynamics: Research and Theory*. Row, Peterson. Pp. 287-301. 原岡一馬訳 (1959) 集団決定の研究 カートライト&ザンダー編/三隅不二訳編「グループ・ダイナミックス」誠信書房 Pp.341-357.
- 佐々木薫・永田良昭 (1986) 技法としての集団力学 佐々木薫・永田良昭編「集団行動の心理学」有斐閣 Pp.302-316.

## The Effect of Lewinian Group Decision as Applied to Blood-Donation Campaigns

### ABSTRACT

The effect of Lewinian group decision method as applied to blood-donation campaign was investigated. Of twenty-seven 4–6 person groups of undergraduate students (excluding seniors), ten groups participated in the group decisions about 8~11 weeks before the autumn blood-donation campaign (the earlier) and the remaining seventeen groups underwent the same decision procedures about 1~3 weeks before the campaign (the later). And five weeks after the autumn campaign there came another (winter) campaign. Of the later, 15.3% donated blood during the autumn campaign and 9.4% donated during the winter campaign. These rates were significantly higher than the donors' rate of 4.3% among comparable students who had not participated in the group decisions (control group). The corresponding rates of the earlier were 6.1% and 2.0% which proved no significant difference when compared with the rate of the control group. Those donor's rates, when ordered according to the length of interval between the group decision experienced and a donation campaign, showed a monotonous decrease as the interval increased. Roughly speaking, the significant effect of a group decision diminished when the interval became more than 8 weeks.

A discrimination analysis (Hayashi's Quantification II) of the data collected by means of questionnaires, etc. revealed that the most important determinants and/or correlates with blood-donating behavior were ① perceived consensus within a group for donation, ② factual consensus, ③ past experience of blood donation, ④ attitude change of the group as a whole toward donating through discussion, and ⑤ atmosphere in which the group discussion took place.

**Key Words:** Lewinian group decision, blood-donating behavior, determinants and correlates